

「日本におけるイスラム理解の促進」講演会シリーズ  
第3回：イスラムとメディア—過激主義と「過激」のイメージ

日時：2019年11月13日（水）17：00～18：30

会場：笹川平和財団ビル11階国際会議場

講演者：保坂 修司 氏

（司会） 皆様、本日はご来場いただきまして誠にありがとうございます。ただ今より、笹川平和財団主催、「日本におけるイスラム理解の促進」講演会シリーズ第3回「イスラムとメディア—過激主義と『過激』のイメージ」を開会いたします。

私は、本日司会を務めさせていただきます、笹川平和財団の田中と申します。本講演会シリーズは、ニュースなどを通じて耳にすることの多いイスラムに焦点を当て、そのさまざまな側面をテーマに講演会を開催することで、イスラムについての理解を図ることを目的としています。

日本では近年、メディアなどを通じて「イスラム」という言葉を目にする機会が増えました。しかし、「イスラム」と聞いても漠然としたイメージを持つ人は多いものの、具体的にどのような考えや文化・風習を持っているのか、またメディアで報じられているような事象の背景にはどのような歴史や思想があるのかについて理解している人は多くはありません。

しかし、近年の外国人観光客や外国人労働者の増加に加え、東京オリンピック・パラリンピックを控え、日本でも市民レベルでイスラム教徒—ムスリムに接する機会は増えていきます。

そのような状況の中で日本人とムスリムを含む外国人が共生できる社会を築くためには、イスラムに関する知識と理解が必要となります。そのために、本講演会シリーズでは、専門家の方を講師としてお迎えし、皆様にイメージから踏み込んでイスラムについての理解を深めていただけるように、テーマ別に全4回の講演会を行っております。

本日第3回は、日本エネルギー経済研究所中東研究センター研究理事の保坂修司先生を講師としてお招きしております。保坂先生は、バルシャ湾岸地域近現代史、ジハード主義や中東メディア論を専門にされており、懐疑派とされる人々が持つイデオロギーの成り立ちや変遷、彼らが利用するメディアについて詳しく、現代の中東情勢を幅広く分析されております。本日は保坂先生に「イスラムとメディア—過激主義と『過激』のイメージ」を主題としてご講演いただきます。

ご講演の後には質疑応答の機会を設けておりますので、振るってご質問ください。また、お手元にアンケートもお配りしておりますのでご協力をお願いいたします。

それでは、保坂先生、よろしく願いいたします。皆様、拍手でお迎えください。（拍手）

■講演：イスラムとメディア—過激主義と「過激」のイメージ

保坂 修司 氏（日本エネルギー経済研究所中東研究センター研究理事）

ただ今ご紹介にあずかりました、日本エネルギー経済研究所中東研究センターの保坂と申します。よろしくお願いいたします。

笹川平和財団さんから、日本におけるイスラム理解の促進という講演会で話をしてくれと言われて、特にいわゆるテロについて話してほしいというふうにと言われて、だいぶぐずりまして、「そんな話はしたくない」と。何回か押し問答があった末、ようやくこのあたりで落ち着いたということになります。

ご承知のとおり、中東ではさまざまな形でテロがあり、つい先日もテロ組織イスラム国 IS の指導者であったアブー・バクル・バグダーディーが殺害されるという事件がありました。ただ、そういうことばかりがイスラムでは決してありませんので、私としては、なるべくイスラムの中の明るいほうを、あるいは一般の人たちにも興味を持っていただけるような話をしたいと願っているのですが、残念ながら、世界情勢、イスラム情勢のほうをそれを許してくれないので、どうしてもこういう話をすることになってしまいます。

ただ、中東あるいはイスラム世界でテロが頻発しているということはもちろん否定はできません。その一方で、メディアによる中東あるいはイスラム報道というものが必ずしも実態をきちんと捉えているわけではないという点もぜひご理解いただければと思います。

問題は、では何を見ればいいのか、何を読めばいいのかということになってしまうのですが、それに対する答えは、残念ながら今日はお話することは多分できないと思います。ただ、皆さん方が判断する材料、素材のようなものを今日は提供できればいいかなと考えております。

こちら [スライド 1] で、皆さん方が、中東あるいはイスラムといった場合に大体イメージするものを上に並べておきました。砂漠、オアシス、ラクダ、石油、石油成金、そして戦争があって、テロがあって、あるいは難民があると。これは現実の一部でもあるわけで、問題は、こういったものがメディアという一種のフィルターを通して我々のところに入ってくるわけですが、その段階では必ずしも正確な形で我々の目、あるいは我々の頭の中に届くわけではないということです。場合によっては増幅されていたり、場合によってはゆがめられていたり、場合によっては正しい情報が入ってくるかもしれないけれども、それも必ずしもそういうものばかりではないと。

よく「百聞は一見にしかず」といいます。確かに、現地に行って、観光でも何でもいいと思いますが、それで得た情報と、本あるいはメディアを通じて得た情報というのがしばしば大きくずれていることがあります。これも紛れもない事実なわけですが、かといって、「一見」だけで果たして判断していいものかという点もやはり考えておく必要はあるのだと思います。「一見」というのはあくまで一見であって、残りの「九十九見」を見ない限りは全体像をつかむことはなかなか難しいということです。

また近年は、インターネットあるいは SNS という形で現地の情報がリアルタイムで、しかも動画付きで見ることができる、体感することができる。これも確かに我々研究者にとっても非常に大きなインパクトのある事件だったのですが、同時にこういった情報は、しば

しば意図的にゆがめられてしまう。場合によってはねつ造されていると。そういった点も忘れてはならないと思います。

こちら [スライド 2] は、アメリカの Freedom House という NGO がつくった、報道の自由度を世界地図上にマッピングしたものです。濃い赤——茶色みたいな色でしょうか——は報道の自由がない、悪いというところになります。ご覧いただくと分かりますけれども、イスラム世界と大枠で言っているこの辺り、アフリカから中東を経て南アジア、そして東南アジアの辺りはほとんど報道の自由がないというふうに判断されています。もちろんこの Freedom House の基準が正確かと言われれば、必ずしもそうではない。従って、あくまで目安だというふうに思っただけであればいいと思います。

一方、こちら [スライド 3] は、RSF (国境なき記者団) という、パリに本拠地を置くジャーナリストの自由を守る NGO ですけれども、そこがつくった報道の自由度になります。ご覧いただいて分かりますとおり、黒で描かれたところは報道の自由が全くないところになります。色の薄いほうは自由度があるところなのですが、イスラム教徒の多い地域、イスラムの影響力の大きいところに関しては、残念ながら、報道の自由はやはりここでも非常に低いということになっています。

こちら [スライド 4] は先ほどの Freedom House のランキングに戻りますけれども、政治的自由度を表しています。緑が政治的自由度のあるところ。黄色は部分的な自由があるところで、青あるいは紫でしょうか、これは政治的自由がないところという色分けになっています。報道の自由がないところなので、そういうところに政治的自由があるはずはありません。従って、ここで見ても分かるとおり、やはりイスラムの影響力のあるところの多くは政治的自由もないということになっています。

私自身は専門がアラブなものですから、アラブ諸国を中心に言いますと、例えばここに小さくありますが、これはクウェート、それからヨルダン、レバノン、イスラエル、モロッコ、チュニジア——このあたりが数少ない合格点のところ。それ以外は基本的には独裁国家だというふうに考えていただければと思います。

ここでやはり難しいのは、イスラムと政府というのがイコールでは結ばれないということです。イスラムの国で自由なところもありますし、そうでないところもある。決してイコールで結んではならないという点は一応頭に置いていただければと思います。ただ、全体的な傾向としては、残念ながら、イスラム世界は報道の自由、インターネットの自由、政治的自由、いずれも点数は非常に低いといわざるを得ないわけです。

では、イスラムと情報はどういう位置付けになっているのか。イスラムにおける情報、報道の位置付けについて少し簡単に説明しますが、その前に、中東における情報という話で少し簡単に説明しておきたいと思います。

宗教というと、大半の人たちにとっては非常に抹香臭いというか、古びたものに聞こえるかもしれませんが、実は宗教こそが情報を最も重要視していたものにほかなりません。具体的に言うと、時代の最先端の情報通信技術を宗教は常に利用し、また、しばしば独

占してきたわけです。例えば古代メソポタミアの楔形文字、あるいは粘土板もその時代の最先端の情報通信技術なわけですが、あぁいった文章の中に多くの宗教的な言説が含まれているというのは、まさに宗教がいかに情報通信技術を利用してきたかということをよく表していると思います。同様に、古代エジプトの象形文字あるいはアルファベットと羊皮紙の関係も、いずれも宗教と情報通信技術の密接な関係を表しています。

一方、イスラムというところに焦点を当てると、イスラムの中の最も重要な根本聖典であるクルアーン（コーラン）は、元々アラビア語で「読誦するもの」という意味になります。従って、クルアーンの基本は、暗記してそれを読むものということになります。長い間、書かれたもの、この場合は写本ですが、あくまで暗記するための、あるいは読むための補助にすぎませんでした。もちろん書かれたものにしても、基本は写本が中心で、印刷されたものというのは、実はつい最近にならないと出てきませんでした。

また、翻訳についてもイスラム世界ではクルアーンの翻訳は許されていませんでした。翻訳された段階で、それはクルアーンではなくて単なる解説書である、解釈であるというふうを考える傾向が強いわけです。

この下に図式化したものを挙げておきました [スライド 5]。これはハディースという預言者ムハンマドの伝承で、預言者ムハンマドがこういうことをしました、あぁいうふうにおっしゃいました、という伝承です。これはクルアーンと並ぶイスラムの最も重要な資料になるのですが、預言者ムハンマドが何かを言いました、こういうふうに行っているのを目撃しました、というのがまず第1段階の伝わり方になるわけです。それを次の人に伝えていく、さらにそれを次の人に伝えていく、こういう形で情報が伝達されていくわけです。

この A という人物は、非常に正直者でいい人である。従って、彼が言っている預言者ムハンマドの言葉は正しいであろう、いや、絶対に正しいはずでだ。これはアラビア語では普通サヒーフ——真正という意味になります。

そして、この A という人が B という人に伝える。ところが、この B という人は、A という人に比べるとそれほど正直ではない。時々うそをつくかもしれない。ただ、一般的には正直なので、彼が伝えた内容は、今度はサヒーフからハサン——良好・良いという意味ですが、それでも——に少し格下げされます。

この B という人が伝えた伝承が C という人に伝わっていくのですが、しかし、この C という人はかなりのうそつきである。そうすると、このハディース自体はダイーフであるというふうにしばしば判断されるわけです。ダイーフというのはアラビア語で「弱い」という意味で、この伝承の経路に疑問がある、そういうたぐいの伝承になります。

これはイスラムの伝統的な情報の伝わり方になります。情報の正しさというのは、まさに伝承の経路によって決まっていくわけです。この伝承の経路のことをアラビア語でイスナードと言うのですが、こういう形での情報の正しさを担保するやり方というのがイスラムでは長い間中心的な考え方として残っていました。

もちろんクルアーン、あるいはハディースというのがイスラムの中で最も重要な情報の

源であるとするならば、それに反するような情報は一体どういうふうに扱えばいいのかというと、残念ながら、イスラムにおいてはしばしばイスラムと無関係な、あるいはイスラムに反するような情報を燃やしたり破棄したりという形で、いわゆる焚書坑儒のような事件がしばしば起きています。

こちら [スライド 6] が、先ほどお話した中東と情報通信技術の関係になります。これらの楔型文字、粘土板、あるいは象形文字とパピルス、アルファベットと羊皮紙、これらがみんな中東起源であるという点は非常に重要になってくるわけです。今でこそ中東は、残念ながら、情報通信技術からはだいぶ遅れてしまいましたけれども、少なくともかつては、古代の時代、あるいは中世の時代ぐらいまでを含めて情報通信技術の最先端を歩んでいたという点は忘れてはならないと思います。

ところが、これが一気に状況が変わってくるのが 15 世紀ぐらいになります。活版印刷がヨーロッパで確立する。それに対するイスラム世界の反応というのは、残念ながら、かなりネガティブなものでした。クルアーンが最初に活版印刷で印刷されたのは 16 世紀といわれています。あるいはもっと早いという説もあるのですが、どこで印刷されたかという点、メッカでもマディーナでもカイロでもイスタンブールでもなく、イタリアなわけです。

実は、ヨーロッパで活版印刷の技術が確立し、情報が一気に拡大するこの時期に、イスラム世界では情報を制限するという方向で動いてしまいます。特に宗教関係について言うと、例えばアラビア語の宗教関係の本、あるいはイスラム法に関する本などの活版印刷は禁止されてしまいます。例えばオスマン帝国時代には、アラビア語の活版印刷は死刑だというお触れがしばしば出されます。ただ、ここで駄目だというふうに言われたのはイスラム関係だけで、キリスト教関係の資料、あるいはユダヤ教関係の資料については活版印刷が許されていました。

例えばクルアーンそのものにしても、翻訳はまずスペインで行われました。また、その翻訳の活版印刷も 16 世紀に行われるという具合に、ヨーロッパと中東イスラム世界で情報通信技術に対する立場が一気に逆転してしまうということが起きたわけです。

中東でその遅れに気がついたのは 18 世紀でした。オスマン帝国で 18 世紀の初めにイブラヒム・ミュテフェリカという人がイスタンブールに印刷所をつくり、そこで初めてアラビア文字——この場合はオスマン語ですけれども——の印刷を始めます。また、エジプトではカイロにあるブーラクという印刷所で初めてクルアーンが印刷される。これは実は 20 世紀になってからなのですが、ブーラクの印刷所自体はもう少し古くからあります。

なお、アラビア語の活版印刷をエジプトで最初にしたのは誰かという点、実はエジプト人ではなく、フランス人（ナポレオンのエジプト遠征のとき）になるわけです。近年というわけではなく、もう少し古くからあるのですが、こういうことわざがあります。「エジプト人が書き、レバノン人が出版し、イラク人が読む」と。エジプトやレバノンやイラクに住んだことがあると、「ああ、なるほどな」というふうに思う言葉で、エジプト人がしゃかしゃかと適当に書いたやつを商売のうまいレバノン人が本にして、それをイラク人がまじめに読

むという構図。これは現代でもある程度生きております。

ただ、最近ではエジプト人以外の書き手もだいぶ増えていますが、残念ながら、イラク人は戦争やテロで本を読むだけの時間すらありません。また、レバノン人が出版する——これは今でもかなり生きています。

この画像 [スライド 8] は、まさにそういうものを挙げたのですが、左上が 1538 年にベネツィアで印刷されたクルアーンになります。活版印刷です。その隣は、1924 年にアラブ世界で初めて印刷されたクルアーンになります。ちなみに、右上のほうは『マナール』と呼ばれるもので、これは雑誌なのですが、19 世紀から 20 世紀ぐらいの多くのアラブ人の知識人の間で読まれた雑誌です。それから、一番右上が『アフラーム』というエジプトの新聞になります。こういったものも必ずしも順調な形で中東で、あるいはイスラム世界で進められていたわけではありません。ちなみに、この下の画像は、先ほどのイブラヒム・ミュテフェッリカの印刷所で印刷されたキヤーティフ・チェレビーという人の『Cihannümâ (世界の鏡)』などという感じでしょうか、たまたま日本の地図が出ていたので一応挙げておきました。

時代は少し変わって現代に近くなります。サウジアラビアのケースです。サウジアラビアは、1902 年に初代国王のアブドゥルアズィーズが事実上の建国をして、そこから国がスタートするわけですがけれども、当初からワッハーブ派といわれる教え、考え方に強く影響を受けた国家としてスタートしました。ただし、アブドゥルアズィーズ自身は非常に開明的な考え方を持っていた人で、なるべく欧米の新しい技術を取り入れようと考えていたわけです。写真であったり、電話であったり、電信であったり、あるいはラジオであったり、こういったものを積極的に導入します。ただ、サウジアラビアの保守的な人たちは、これらはみんな欧米によってつくられたもの、異教徒によってつくられたもの、場合によっては「悪魔の所業である」というふうに言って排斥しようとしてきました。

もちろんこういったものがなければ近代化もできないので、アブドゥルアズィーズは力尽くでも保守的な人たちを抑えつけて、西洋の科学技術の導入を図ります。しかし、例えば 1960 年代にサウジアラビアがテレビ局を導入しようとする、このときには国内各地でそれに反対する暴動が発生します。その中にはサウード家の王族も暴動の中心的な人物として含まれていました。

もちろんこういったものは、なぜ反対するのかというさまざまな宗教的な理由はつけられるのですが、特にサウジアラビアにおいては、生き物、生物を描くことに対して非常に強いアレルギーがある。単に人間だけではなくて動物でもそうです。それから音楽にも非常に強い拒否反応があって、こういったことから、例えばサウジアラビアでは長らく映画館が禁止されていました。ようやく映画館が解禁になったのは 2018 年の 4 月。コンサートもつい最近ようやく一般的に利用されるようになっていきます。

アラブ諸国のメディアを見ていくと、比較的先進国としてエジプト、シリア、あるいはレバノンというような国々が考えられています。ただし先進国とはいっても、これはスタート

が早かったというだけで、非民主的な独裁体制の下では自由なメディアというのは存在できないわけです。国営メディアがメディアの中心になるのですが、国営メディアという考え方には、いわゆる社会の木鐸としての役割というものは一切考慮されていません。国営メディアの考え方というのは、国民の知りたいことを伝えるのではなくて、体制側が国民に伝えたいことを伝えるのが仕事であるということになります。政治的には、当たり障りのない情報を流したり、あるいは体制、統治者、支配者を称賛するのが主たる内容になっていきます。

こういった流れの中で、もちろんこういう情報には国民はうんざりするわけですよ。少しでも面白いもののほうがいい、あるいはレベルの高いものが必要であるということで、少し多様性が出てきたのが最近の状況ではないかと思います。

ただ、アラブ諸国の場合非常にやっかいなのは、これは私自身の研究の仕方にもよりますが、例えばアラブ世界、中東、あるいはイスラム世界を幅広くカバーするような情報を新聞から得ようとした場合には、大体多くの研究者は『ハヤート』、あるいは『シャルクルアウサト』といった新聞を使います。問題は、この2つともサウジアラビアの王族資本だということです。しかも残念ながら、『ハヤート』はつい最近活動をほとんどストップしてしまい、今言ったような中東全域をきちんとカバーできるような新聞、紙のメディアとなると、『シャルクルアウサト』というサウジアラビアの王族、しかも今の国王に近い新聞が唯一残された素材になります。一方、テレビの多くは国営テレビで、これはまたものすごく退屈なわけです。

私がサウジアラビアに住んでいたのはもう20年以上前なのですが、サウジアラビアにはこういうジョークがありました。サウジ人だけが入る地獄がある。そこはこぎれいな部屋で、ベッドもあって、バスルームも完備しているような素晴らしい部屋なわけです。では、なぜそれが地獄なのかというと、そこにテレビが1台あって、そのテレビにはサウジアラビア国営テレビしか映らないと。サウジ人にとってもサウジのテレビというのはそれだけつまらないものだったということになるわけです。

伝統的に、中東の中でも比較的自由的な国となると、例えばクウェートであるとかレバノン、あるいはモロッコなどのメディアが利用されることは比較的多かったです。ただ、いずれも国としては非常に小さく、必ずしも影響力が多いわけではないと。

そういったものの反動のような形で出てきたのが衛星放送ということになります。1980年代からものすごい勢いで衛星放送が中東でもつくられていきます。一番有名なのは、MBCという衛星放送です。今現在、恐らくアラブ世界では最も大きな衛星放送のメディアということがいえると思います。ただ、これもサウジアラビア資本になります。それから、こちらは多くの方がご存じだと思いますけれども、ジャジーラ、アルジャジーラというカタールのメディアです。この2つはライバル関係にあるのですが、元々MBCのほうが90年代の初めにアラブのCNNとしてあちこちで評価されたわけです。

ちょうどそのとき私はサウジに住んでいたのですが、初めてMBCが大きな役割を果たした場面というのは今でも覚えています。1991年にスペインのマドリードで中東和平の国際

会議が開かれました。そのとき初めてパレスチナとイスラエル、そしてアラブ諸国の代表が同じテーブルに着きました。そして、MBC は当時のイスラエルのシャミール首相のヘブライ語の演説を生放送で流したわけです。恐らくサウジアラビア国内でヘブライ語の演説が生で流れるというのは、これが初めてだったと思います。確かにそのときには「ああ、時代は変わったんだな。中東のメディアも変わってきたんだな」と私自身は思いました。それをまさに凌駕するような形で現れたのがジャジーラということになります。こういった衛星放送は、自由のない中東のメディアの中で一つの風穴を開けたというふうに言ってもいいのではないかと思います。

そして、それに輪を掛けるような形で風穴を開けたのがインターネットということになります。こちら [スライド 11] は、主なイスラム諸国のインターネットの接続を時系列で並べたものなのですが、マレーシア、インドネシア、トルコという具合に、アジア、東南アジアの国が比較的最初に来て、その後、中東の国々がそれを追う形でインターネットと接続するというのを見てとれると思います。大物としては、サウジアラビアが 1994 年に最初に接続しているのですが、実際に商用の利用が始まるのは 1999 年で、最初の接続から 1999 年まで何をしていたかという、どうやって検閲したり、規制したりするのが効果的なのかをこの間、調査研究をしていたわけです。

通常、サウジアラビアのこの当時のやり方をシンガポール方式とか中国方式というふうにいいます。全てのインターネット利用者が 1 つのプロキシサーバーを経由してインターネットにつながっていく。このサウジアラビアの国内にある出口のところで見えはいいリストというのをつくり、そこに行こうとすると、全部はねられるというようなやり方です。こういうやり方をつくって、サウジアラビアはようやくインターネットを国民に解放することにしたわけです。

ただ、これまでの例えば活版印刷に対するアレルギー反応、拒否反応と比較すると、インターネットに対する拒否反応は比較的穏やかだったのかなという感じはします。例えば右側に挙げたのは [スライド 11]、両方とも 1997 年ですけれども、イランとイラクという、ある意味最も自由のない 2 つの国々のインターネットに対する考え方です。両方とも、インターネットは欧米の腐敗堕落した文化をもたらすものであるということで拒否反応を示しているわけです。ただし、やはりこれがないと、もはや 21 世紀には行けないという焦りもあったので、さまざまな形、工夫をしながらで、インターネットに接続していきます。こういう流れ自体を変えることは恐らく不可能だったと思います。

ただ、インターネットが始まると同時に出てきたのがサイバー・ジハードという、インターネット上でのイスラム対不信仰者、異教徒の戦いということになります。イスラエルという国は、インターネットでも圧倒的にアラブ諸国を凌駕して、先進国として君臨していました。したがって、インターネット黎明期中東関係の資料を得ようと思うと、たとえば、イスラエルの外務省にアクセスするのが一番手早かったわけです。そういう状況の中でようやくアラブ諸国もインターネット上にいろいろな情報を提供してくれるようになるので

すが、物理的・地理的な紛争が、仮想空間上でも同じような形で戦いが始まるのがまさにこのサイバー・ジハード——イスラム側から見ればですが——ということになります。

黎明期で一番有名になったのが、2000年10月に起きた、Dr. Nuker という人がアメリカのユダヤ人団体 AIPAC のサーバーに進入して URL を書き換える、中身を書き換える、あるいは AIPAC の個人情報を盗んでいく、こういう事件がありました。ちなみに Dr. Nuker というのはパキスタン人といわれています。これは明らかにイスラエルあるいはユダヤを狙ったジハードという位置づけで、当時まだ SNS はないのですが、掲示板などではこの Dr. Nuker の行ったことに対してイスラム側からかなり称賛の声が上がっていたのをよく覚えています。

そういうことから、サイバー・ジハードに対する関心も非常に高まってきました。ここに挙げたのは [スライド 13]、特に IS あるいはアルカイダも含めて過激な人たちがどうやってインターネットを使っているのかということに関する——英語だけでも——さまざまな本です。日本語については、すみません、宣伝で申し訳ないのですが、私の本もございますので、ご関心のある方はぜひ読んでいただければと思います。ただ、もう 5 年ぐらい前の本なので、すでに古くなってしまっています。この分野の一番のやっかいなことは、数年たつと全部時代遅れになってしまうことです。最近はまだいろいろな新しい本も出ているのでお読みいただければと思います。

さて、ここからようやく本題になるのですが、イスラムに関する正しい情報とは何なのかということをお話ししたいと思います。例えば日本のメディアが伝えるイスラムに関する情報、欧米メディアによるイスラムに関する情報、さらには地元メディアによるイスラムに関する情報、これらのうちどれが正しいのか、どれを見ればいいのか。当然、日本や欧米のメディアは現地のものではないので、言葉とか距離、あるいは文化などの壁があるわけです。

一方、地元のメディアは政府による検閲があるので、これがまた正しい情報を伝えているわけではありません。インターネットにしても同様で、検閲その他があるので、現地にいると、現地の情報が必ずしも分からないことがあります。中東やイスラム世界のインターネットでは、検閲を受けるので、現地の政府にとって都合の悪い情報は出てこないことがあります。むしろ日本や欧米にいたほうが正しい情報をつかめる可能性も多いわけです。そうすると、日本のメディアを使うのか、欧米のメディアを使うのか、あるいは地元メディアを使うのかというのは、状況に応じていろいろ変えていかなければいけないということになります。

ただ、日本から見る場合、日本のメディアより、あるいは現地のメディアよりはどうしても欧米のメディアに信頼を置くという傾向があるので、この点はやはり注意が必要かと思えます。

最近、特にそれに加えて現地の情報をリアルタイムで得られるということで SNS が非常に重要になっています。ただし、これもさまざまな形で検閲を受けたり、また恣意的な形で情報を拡散させたりするような人たちが出てきています。従って、単に SNS をだたら

眺めているだけでは、場合によっては状況を見誤ってしまうということにもなりません。特に組織的な情報操作という問題に関しては相当注意しないといけません。

一方、学術的な研究という点に関しては、一応中立的であるというふうを考えられてはいますけれども、実際には、特に現地の研究などはどうしても政治の問題がこの中に入ってきてしまいます。あるいは非ムスリムによる研究とムスリムによる研究を比べた場合もやはり同じことがいえるわけです。信仰のために研究する人もいれば、そういったものとは全く離れて、たとえムスリムであったとしても中立的な立場で研究するケースもありますし、完全に信仰のためということで研究をするケースもあります。こうしたものをどうやって見極めるかというのは、実は非常に難しいです。

確かに距離の壁は縮まりましたけれども、同時に、一つ一つの情報を皆さん方がどうやって見極めていくのか、いわゆるメディアリテラシーの重要性、皆さん方の判断力というのが問われる時代になったということは重要だと思います。

実際、なるほどなという情報がたくさんあるわけです。例えばここ [スライド 15] に書いたものとしては、1980年代後半、末ぐらいの東ドイツ等の東欧諸国で始まった東欧革命です。よくいわれる言説として、西側の衛星放送を見た東側の住民が、西側諸国の豊かさに気付いて、自国政府のうそに腹を立てて革命を起こしたのだという言説があります。確かに何となく腑に落ちる話ではあるのですが、ちょっと考えれば分かるように、恐らくこの1980年代の前から、東側の人たちは既に西側の国のほうが圧倒的に優位だということは知っていました。わざわざ衛星放送を見るまでもなく知っていたわけです。

また、最近2010年末ごろからのいわゆるアラブの春の中で生まれた言説としては、ウィキリークス—アメリカの公文書の情報が大量に盗まれて、それがインターネット上で誰でも閲覧できるようになった。そこに描かれていた自国政府の腐敗を知った若者たちが政府に対して反旗を翻した。これもよくいわれる言説なのですが、よく考えるとおかしい話で、これはチュニジアの話なのですが、チュニジアの若者は自国政府が腐敗しているのをとくに知っていたわけです。アメリカの公文書に描かれたチュニジア政府の腐敗、チュニジアの現体制の腐敗というのは、その若者たちから仕入れた情報で、これは実は順番が逆になっているわけです。

同じくチュニジアのケースで言えば、大学を卒業したけれども仕事がなくして露天商をしていたら、女性の警察官に侮辱されて商品を没収されたと。それに絶望した若者が焼身自殺を図った。これがアラブの春のきっかけになったといわれていますけれども、実際には、焼身自殺を図った若者というのは大学を卒業したわけではありませんでした。中学ぐらいで学校をドロップアウトしたプロの露天商だったわけです。

しかし、なぜこのような情報がほとんど事実のように語られるかというと、まさにチュニジアで革命を起こした層というのが、こういう話でないと飛び付かないからなわけです。大学を卒業して失業している職のない若者たちこそがまさに一番怒りを持っている人たちなので、その怒りに火をつける情報としては、この焼身自殺を図った若者というのは、大学を

卒業した失業者でなければいけないということになります。

また、これは日本関係ですけれども、湾岸危機、湾岸戦争で日本は軍を派遣せず、財政支援しかなかったのが、戦争が終わった後クウェート政府に感謝されなかった。しかし掃海艇をペルシャ湾に派遣したら感謝されました。ここから自衛隊の海外派兵という話がスタートしていくわけです。しかし、私は当時何度もクウェートにいたのですが、クウェート政府は、日本政府には少なくとも十分感謝していたはずで、我々がクウェート政府の高官などと話をすると、必ずといっていいほど日本に対して感謝の言葉がありました。

では、なぜ感謝されなかったと考えられるようになったのか。実は湾岸戦争終了直後、アメリカの新聞にクウェート政府からの大きな一面広告が掲載されました。クウェートが多国籍軍に参加した国々に国旗を掲げて、感謝の意を表明したのです。しかし、そこに日本の国旗が抜けていました。たぶん単に忘れてただけだと思います。クウェートに住んだことがある方であれば、多分そうだろうと思う話なのですが、しかし、自衛隊の派遣を求める人たちによってそれが利用されることで、血も汗も流さず、お金だけですませようとした日本は感謝されなかったというロジックが作られたのです。

自衛隊の海外派遣について私は個人的には賛成しています。むしろ積極的に出るべきだと思っているのですが、だからといって、このように情報をねじ曲げることがいいことなのかどうかとなると、これはこれで話は別になるわけです。

アラビア語のメディアというのは、ちょっと触れましたけれども、新聞にしろテレビにしろ、今は多くの場合、湾岸諸国が圧倒的な力を持っています。もちろんこれはお金の力でもあるのですが、新聞で言うと、先ほど言った『シャルクルアウサト』あるいは『ハヤート』、のほか、『クドスアラビー』という新聞もあります。『クドスアラビー』は元々はパレスチナ系だったのですが、今はカタール資本になっています。衛星放送の場合もアルジャジーラ、アラビーヤ、あるいはスカイ・ニュースは、カタール、サウジアラビア、UAEといった湾岸のメディアになります。そうすると、どうしても我々は、湾岸諸国の政府が考えているような、あるいは湾岸諸国の政府が伝えたいような情報によって、情勢を判断せざるを得ない部分が出てきてしまうわけです。

何度もお話ししますが、湾岸諸国はほとんどが独裁国家ですから、日本ではジャジーラというのは自由な報道と見られがちですけれども、どう考えても自由ではありません。一番重要なのは、自分の国であるカタールについてのニュースはほとんど流しません。それだけでももうかなり異質なメディアだというのはよく分かると思いますけれども、ただ、いずれにせよ、それぞれの国の立場を反映したものであると同時に、割とポピュリスティックな報道をしがちであるという点は忘れてはならないでしょう。

特にジャジーラであるとか『クドスアラビー』といったメディアは、そのポピュリスティックな部分で人気を博していました。例えば、アルカイダなどに対してどちらかというと融和的な報道をすることで、不満を持った国民の支持を集めてしまおうという傾向も残念ながらあるわけです。個人的にはジャジーラ放送とアラビーヤ放送を見て足して 2 で割るとい

うのがちょうどいいところかなという感じはしています。

実際、中東のメディアあるいはイスラムのメディアは、それぞれの国の対立を背景に宣伝合戦を繰り広げています。例えば左側の写真 [スライド 17] は、つい最近始まった『アラブニュース』というサウジアラビアの英字紙が始めた日本語版になります。一方、右側は古くからあるのですが、イランの『Pars Today』という新聞の日本語版になります。いずれも日本関連のニュースをかなり積極的に取り上げているのですが、正直なところ、例えば『アラブニュース』にしても、中東あるいはサウジアラビアに関心のある人は大体英語ぐらいはできる人が多いので、日本語版を出して何か意味があるのかなと思ってしまいます。

そして、もう一つはロビー活動です。これが非常にやっかいなのは、サウジアラビアにしるカタールにしる、あるいは UAE にしる、自国の立場を説明するために莫大なお金を投入して、例えばアメリカの広告会社やロビイストに活動してもらっています。こうなってくると、一種のポトラッチのようなもので、どちらがどれだけお金を出せるかによって、どちらの国の立場が正しいかという事態になりかねないわけです。

このやっかいなのは、単にロビイストや報道機関、広告会社だけではなくて、シンクタンクや大学のようなところにまでこういった湾岸諸国のお金が入ってきているということです。日本でも湾岸諸国のお金が入っている大学は存在していますし、それが欧米となればさらに多いわけです。そうすると、そのシンクタンク、あるいは大学の研究者がサウジアラビアに好意的なニュースを書く、あるいはカタールに好意的なニュースを書く、それをどうやって判断していくか。わざわざその背後まで見て、そのシンクタンクあるいは大学の研究者がどこからお金をもらっているのかということまで調べないと、正しい情報というのはなかなかできてこないことになります。

これは『gold ring』という漫画なのですが、UAE で発売されている漫画です。絵面を見れば分かりますけれども、原作を書いたのは UAE の人で、絵を描いたのは日本人の漫画家の人です。鷹匠を描いた漫画で、UAE では賞も取りました。それから、日本の「SASUKE」という番組をご存じでしょうか。これも中東・イスラム世界では大人気で、アラビア語版やヘブライ語版も作られています。

こちらはつい最近、始まった新しい番組で、アラビア語では「ヒスン」といって、砦あるいはお城という意味の番組です。勘のいい人はもしかしたら分かるかもしれませんが。これは 1980 年年代に日本でやっていた「風雲！たけし城」のアラビア語版です。先ほど少し触れましたけれども、それが最近サウジアラビアの **MBS** という局でスタートしました。インターネット上で検索すれば、フル・バージョンも見つかるでしょう。もちろん全編アラビア語なのですが、お笑い番組ですので、ほとんどアラビア語の知識がなくても、ある程度笑えると思います。この人が皇帝役、王様役なのですが、一応エンペラー・タケシという名前になっています。ただ、この人はエジプト人の有名なコメディアンです。

最後に、ようやく過激のイメージというところになります。9.11 以降、さまざまなジハード主義組織が宣伝としていろいろな媒体を使うようになりました。それが我々にどうい

影響を与えていくのかということをお話ししていきたいと思います。9.11 の実行犯であるアルカイダ、そして、そこから生まれたさまざまな支部がさまざまな形での宣伝活動を展開しています。

例えばこちら [スライド 19] は、1980 年代にアフガニスタンなどを中心に読まれていた『ジハード』という雑誌になります。これをつくっていたのは、アブドゥッラー・アッザームという、アルカイダの精神的な創設者といわれている有名なビン・ラーディンの師匠に当たる人なのですが、その人が中心になって出していました。主にアラブ人の義勇兵——ムジャヒディンといわれる人たちのアフガニスタン、あるいはパキスタンでの活躍ぶりを描いたものです。ここで取り上げられると、国に帰ると一応ヒーローとして扱われるようになります。こちらはつい最近なのですが、IS のメディア部門であるアアマーク通信というのが出した IS の 2019 年度の上半期の事件数を描いたインフォグラフィックスになります。

こういったさまざまな形でさまざまな媒体を使ってテロ組織が宣伝活動をするわけです。特に我々がこういったものを真剣に考えるようになったのは、一つは、アルジャジーラがアルカイダのビデオを公開するようになったからです。ここで重要なのは、例えばオサマ・ビン・ラーディンなどのアルカイダの指導者たちが流す情報というのは、西側のメディア、日本のメディアでもそうですけれども、とてもとてもこれを流すという勇氣はなかったわけです。たとえ流すとしてもほんのわずかだけ、一部を切り取っただけだったのですが、アルジャジーラはほとんど全てを垂れ流したのです。それが正しいかどうかというのはメディアの人たちの間でも多分議論があるのだと思いますが、いずれにせよこういったものが、少なくともこの時点では多くのアラブ人、あるいはイスラム教徒によって受け入れられてしまいました。これは非常に危険なことでもあったわけです。

こちら [スライド 21] は、アルカイダのリーダーの一人であった人が個人的につくっていたネダー・ドットコムという、彼らの宣伝のためのウェブサイトになります。こちらはまさに 9.11 の直後につくられて、ビン・ラーディンの声明やアルカイダのイデオロギーに関する著作などをたくさん公開したわけです。この画像は 2002 年の 7 月時点のものですが、しばらくすると様相が変わってきます。2002 年の 8 月には完全にハッキングされてしまいました。ハッキングされて、日付によってどんどん変わってくるのですが、一番新しいのはこういう形で今は売りに出されています。これもまさにインターネット上の戦いの結果といえるでしょう。今はこういう形でテロ組織が情報をホームページの形で出すというのは非常にまれになっていますけれども、かつてはこういうのが普通に行われていました。

こちら [スライド 22] は、サハブというアルカイダのウェブサイトになります。これは実はこの発表時点でも生きています。今でもこういう形でアルカイダの情報をリアルタイムで提供してくれるわけです。なぜこんなものがいまだに残っているのか不思議でしょうがないのですが、ここを運営している会社の住所を調べると、イギリスのこういうところになっています。ほんとにここでやっていたら、とっくに摘発されているはずですので、ここでやっているとはとても思えないのですが、いろいろな形で偽装しながら生き残ってい

るといふことになります。

先ほど言いましたとおり、テロ組織や犯罪組織がいわゆるウェブページで情報を提供するの、実は非常に困難になってきています。そして IS、特にアルカイダのような組織は、活動の場をウェブページから電子掲示板 (BBS) に移していきます。特に掲示板の場合にはあらかじめ ID とパスワードを登録しなければならないようにして、警察やスパイ、研究者など、怪しいやつらは入ってこれないようにしています。

そういう形で、掲示板のほうに情報の中心がどんどん移ってくるわけですが、中でも非常に有名なのが、このアブー・ドゥジャナー・ホラーサーニーという人で [スライド 23]、この人はヨルダン人で、しかもお医者さんです。つまりエリートなのですが、彼がアルカイダの機関誌であった『ホラーサーンの前衛』という雑誌に書いたのがこれです。詳しくは説明しませんが、いかにジハードで死ぬことが素晴らしいかということ、滔々と謳い上げたものです。エリートのお医者さんのような人が中心になってこういう掲示板を運営していくわけです。

この人のすごいのは、最後に結局アフガニスタンに行って、アフガニスタンにあった CIA の基地に突っ込んで行って自爆したことです。つまり、インターネット上の仮想空間と現実の戦場がシームレスにつながっているわけです。この恐ろしさというのはやはりなかなか伝わらないのですが、21 世紀はこれがかかなり当たり前になってきてしまっています。ちなみに、この写真がホラーサーニーなのですが、こうやって例えば自爆したりすると伝記が書かれて、その伝記を読んだ人がまた自爆テロリストに憧れてアルカイダに入る、あるいは IS に入っていくということになります。

ここ [スライド 24] にはテロ組織のさまざまな媒体を挙げました。例えばこれは雑誌です。それからこれも雑誌なのですが、例えばこの『<アンダルス>01:12:59』というのは、アルジェリアを中心とするアルカイダ、「イスラム・マグレブのアルカイダ」といわれる組織のメディア部門です。それから、フルカーンというのは IS の一番重要なメディアです。<サハブ>01:13:16 はアルカイダ本体のメディア部門です。それから、カタールイブというのはソマリアのシャバブという組織のメディア部門になります。こういったものを使ってさまざまな情報をリアルタイムで流して、それを多くの人たちが受け取って感化されていくというパターンになるわけです。

特に重要だったのは、これはまさに我々にとっても悪夢なのですが、イラクのアルカイダが日本人の若者を捕まえて、首を切断して殺害、その場面をまさに逐一録画してインターネット上で公開するという事件がありました。単にテロを正当化するようなイデオロギーを垂れ流すだけではなくて同時に極めて残虐な場面を流すことによって、テロの思想に感化されやすい人たちをさらに過激化していくという戦略でしょう。

最近では、情報発信の場が掲示板からソーシャルメディア SNS に移ってきました。当初はフェイスブックやツイッターあるいは YouTube といったごくごく一般的な SNS が使われていたのですが、さすがに最近ほとんど使われなくなっています。ただ、いったんこう

いうところに情報が置かれると爆発的な勢いで拡散していきます。ただ、監視が厳しくなったものですから、今はほとんど使われなくなっています。いずれにしてもいちごっこという感じでしょうか。

今言ったような、割とメジャーな SNS は最近ではほとんど使われなくなっているのですが、一方、ダークウェブやディープウェブといわれるようなグレイゾーンのところ、あるいはもっとさらに深いところが、今テロ組織が主に使うインターネットの場になっています。具体的に言うと、グーグルのようなサーチエンジンでは検索されないものが置かれている場所で、多くは追跡困難であったりします。

これ [スライド 27] は IS のメディア戦略を描いたものですが、IS 自身の流している情報で、多分聞いたことのある方もいらっしゃると思いますが、『ダービク』は IS が出している英語の機関誌です。今はもう出していません。イストクというのはロシア語の雑誌で、クスタンティニーエというのはトルコ語です。ダールルイスラームはフランス語になります。こういった多言語展開のほかに、アラビア語を中心として、フルカーンであるとかハヤートであるとかアジュナードなどさまざまなメディアが展開しているわけです。

そうやって流される情報が今ここに出したもの [スライド 28] なのですが、これはバイオンラジオという日報に当たります。日々のテロ事件の声明などがここで流されます。それらのほかに、これはアアマーク通信という IS の通信社が出しているニュース、報道に当たります。こちらは IS 各支部が流す公式の声明になります。

それから、こちらは、おもにイデオロギーに関する情報で、たとえば、サッカーがイスラム的 (IS 的) に正しいかどうかという論説です。一応 IS の視点から言うと、サッカーは、正しいイスラム法にのっとったサッカーであれば許されるという立場になります。例えばナショナルチームでプレーするのは許されないとか、許されるとするならば、ジハードに役に立つスポーツ、つまり体を鍛えるためにやるのは許されるけれども、そうでない場合にはイスラム的には正しくないので駄目という立場というのが縷々書かれています。アラビア語ができる方はぜひ読んでいただければと思いますけれども、なかなか読み応えのある面白いものです。

IS が奴隷制度を復活したというのはご存じの方は多いかもしれませんが、こちらは、女性を奴隷にすることがなぜ正しいのかということ解説したパンフレットになります。こういったものをインターネット上に公開することによって自分たちのイデオロギーを正当化して、さらにはそれをリクルートの手段として使っていくというのが IS のやり方になります。

最近では、もっぱらテレグラムというアプリが利用されています。これはメッセージを暗号化することによってプライバシーを担保するというので、IS を含むさまざまなテロ組織あるいは犯罪組織がよく使っているといわれています。

ちなみに、こちら [スライド 29] に挙げたのは、テレグラムの本体がほとんど毎日のように出しているものです。たとえば、219 個のテロリストのボットあるいはチャンネルを禁

止しました、と書かれています。1日でこれだけ禁止しているわけです。それだけ莫大な量の危険情報がテレグラム上では流れているけれども、実はそれらをすべて監視できているのはテレグラムの管理会社だけです。我々も一応見てはいますけれども、すべてに目を通すことは不可能です。逆にこうやってつぶされると、我々が監視している、貴重な情報源がなくなってしまうので、痛し痒しということかもしれません。我々としては、テロ組織の情報を得るためにはこういったものを利用しなければいけないのですが、一方で、彼らのアカウントを禁止しなければいけないという公式の立場もあるので、なかなかその間の融通を取るのが難しいということになります。

これ [スライド 30] は最近のテレグラムで報じられた IS の情報になります。IS の指導者であるバグダーディーが殺されて、その後新しい指導者にホラーサーン、つまりアフガニスタンの IS が忠誠を誓った、というニュースが流されています。

こちら [スライド 31] も同じことなのですが、さまざまな地域から新しい指導者に対して忠誠の誓いが行われています。これは先ほどちょっと出しましたが、IS の 2019 年の前半の活躍ぶりを描いたものです。

最後に、時間がだいぶ過ぎてしまいましたけれども、こういったさまざまな言説の中では、しばしば日本は十字軍という扱いになっています。アルカイダにしてもあるいは IS にしても、日本を批判するような言説はしばしば見られます。IS が敵だと名指ししている中には日本もちゃんと入っています。こういったことをきちんと理解しておくこともやはり非常に重要で、そのために我々も日々こういった情報をフォローはしているのですが、残念ながら、こういった情報がインターネット上に流れるということは、同時に、それによって感化される人も出てきてしまうということになるわけです。

しかも、IS のように多言語で情報戦略を展開しているところでは、世界中どこであっても IS のイデオロギーに惹かれる人たちがやはり出てきてしまうというのが現状であり、とりわけヨーロッパあるいはアメリカ等でローンウルフなど、IS との直接のつながりはなくても IS のイデオロギーに感化されて、自分の住んでいるところで事件を起こしてしまう人たちが増えているということは、やはり忘れてはいけないのだと思います。

インターネット上の情報は、もちろん一方でイスラムを称賛するようなページというのはたくさんあるのですが、残念ながら、社会に不満を持つ、社会に対して怒りを持つ人たちがそれを読んで納得するというケースはそれほど多くなく、むしろこういった過激な情報にこそ惹かれていってしまう。そういった現状がありますので、我々としてもこういった情報だけを見てイスラムを判断してはいけないというのはもちろんですが、同時に、美辞麗句で飾られたイスラムあるいは中東が正しいわけではないということもきちんと理解しておく必要があるのではないかと思います。

ただ、その中から正しい情報が何なのかというのを判別するのは非常に難しい。私の場合はもちろん中東に住んでいたということもありますけれども、ただ、私が見ることのできるイスラムの範囲というのは限定されているので、言っていることが全て正しいわけではない

い。どの専門家がどの分野に詳しくて、どれだけ正しい情報を発信しているのかというのを見極める眼力をぜ身につけていただければと考えております。

すみません。時間が過ぎてしまいましたけれども、私の話はこれで終わりです。ご清聴、どうもありがとうございました。(拍手)

## ■質疑応答

(司会) 保坂先生、ありがとうございました。それでは、ただ今より質疑応答に入りたいと思います。お時間が短くなっておりますので、ご質問は、お一人につき一つでお願いいたします。また、差し支えない範囲でお名前とご所属をおっしゃっていただければ幸いです。

それでは、質問のある方は挙手をお願いいたします。

(A 氏) 大変貴重なお話をありがとうございました。すごく初歩的になってしまうのですが、メディアの規制された国から日本に来られたイスラムの方で、接するときメディアとか政府に対するイメージが向こうの国でどうしてもイメージがつくられているので、比較的メディアの自由の高い、政治的な自由も高い日本の人の感覚でイスラムの人に話すときに注意すべきことはどういったことがあるのでしょうか。よろしく願いいたします。

(保坂氏) 日本人が注意すべきことということですか。特にないと思いますけれども、もちろんイスラムに関する基礎的な知識というのは当然必要ですし、うかつにイスラム教徒に対して刺激するようなことは、避けたほうがいいというのは当然あると思います。例えば日本の習慣から見て、「このとんかつがおいしいからぜひ食べましょう」などと無理強いするのは当然良くないです。

ただ、もちろんイスラム教徒の方でも豚肉を平気で食べる人もいますし、そのあたりは人によって違うので、どれを注意すべきというのは難しいのかもしれないですね。あまり細かく言ってしまうと、逆に萎縮してしまうこともあります。日本の常識がそれなりに通じる場合もありますし、また衝突することによって、逆にどこがレッドラインなのかということも分かってくるということもあるのではないのでしょうか。

(B 氏) IS が最も勢力を拡大したとき、スンナ派の住民の住んでいる地域と結構重なっていたと。そうすると、例えばイラクにしてもシリアにしても、比較的スンナ派の住民というのは、イラクの場合にはシーア派から、政権から迫害されていたし、シリアのときはアラウィー派のアサドさんから迫害されていたわけですね。欧米はクルド人を解放部隊としてやったのですが、やはりスンナ派にとっては異教徒が攻めてきたと見て、ある放送では、スンナ派の住民の一部は IS と共に南へ逃げたとかというドキュメントをやっていました。そうしますと、やはり IS があれだけの勢力を保ったというのは、現地のスンナ派の人々が迫害されて、ある程度共感したというか、ほかよりましだと思ったという節があるのではない

かと思っているのですが、その辺はいかがでしょうか。

(保坂氏) 共感する人が存在するのは間違いないと思います。ただ、恐らくそれは、スンナ派がイラクでは少数派で、ほかに頼れるものがなかった、IS のほうがまだましだと考える人が残念ながらいたということだと思います。しかし、みんながISのイデオロギーを支持しているわけではありません。ただし、イラクは選挙で自分たちが支持する人が当選して、彼らが政府をつくって自分の思ったような政策を打ち出してくれる国ではないので、イデオロギーや具体的な政策よりはむしろ宗派や民族別の政治が行われがちなわけですね。そういう中で、少数派であるスンナ派の人たちがISのことをシーア派よりましだと考えてしまったのは、残念ながら否定できません。しかし、基本的に一番大きいのは恐怖だと思っています。

(司会) ほかに質問のある方はいらっしゃいますか。では、そちらの扉側の方。

(C氏) 私は、宗教のことはあまりよく分からないのですが、アルカイダが映像として出した一番ショッキングだったものがバーミヤンの破壊。その瞬間に「えっ」という感じで、「この人たちとは付き合えないな」と思っていました。そうしたらISISが出てきて、ISISとアルカイダが戦争をしている。本当によく分からないという感じで見ていました。

それで、実際、隠し撮りだったのでしょうか、ヨーロッパのほうにISISの人が行って、若年失業者に対してリクルート活動をやっている。宗教の問題というのは取りあえずいいの？ 戦ってくれば取りあえずいいの？みたいな感じを受けまして、それで、10年ぐらい前にぽーんと東南アジアに飛んでしまうのですが、ミャンマーのそのときの首都でヤンゴンというところに巨大なイスラムのモスクができました。しばらくミャンマーの人たちも誰が何のためにここをつくったのか分からなかったのですが、つい最近ミャンマーの人口の7割が大乗仏教、3割がイスラムというところで、なんと内戦状態寸前までいってしまったと。

これらを羅列してくると、みんな好きにやっているの？ 何か大義があってまとまる気はないの？という疑問が湧いてしまうわけです。その辺をちょっとどういうご見解なのか教えていただきたいと思います。

(保坂氏) IS、特に外国人の戦闘員ということで考えると、イスラムの知識がどれぐらいあるのかについては、IS自身の文書があり、ほとんどの人たちが宗教的な知識について基礎的なものしかなかったということがわかっています。つまり、宗教を極めた結果ISに加わる、アルカイダに加わるという人は多くありません。また、それぞれの国で何らかの不満を持っている人たちに対して、その不満を解消する手段を提供できればいいのですが、残念ながら多くの国でISが、あるいはアルカイダが一番魅力的に映ってしまっている現状があ

ります。現状に対し不満や怒りをもつ人々が夢や希望をもてるよう社会なら多分こういうふうにはならなかったと思っています。

それから、ミャンマーについて言えば、おっしゃったイスラム教徒というのは、いわゆるロヒンギャだと思っています。大義の問題を考えるときに非常に興味深い点があります。日本では、ロヒンギャが迫害されたといっても新聞の1面にでかでかとするわけではありません。私は中東が専門なので、中東のメディアで言うと、ロヒンギャの問題というのは扱いがものすごく大きいです。何かちょっとした事件であっても新聞で大きく扱われる。となれば、当然イスラム教徒の中でそれに対して反応する、呼応する人が出ても決して不思議ではありません。その大義の部分と怒りの部分と不満の部分と、さまざまな階層を一気に引っ張り込めたのがアルカイダでありISであり、ということになるのではないかと思います。

ただ、いずれにせよ、宗教の根幹の部分で彼らがきちんとした知識を持っているということに対してはかなり疑問に思っています。それが逆に言えば、リクルーターの付け込む隙になるわけです。彼らはそこを突いて、イスラムではこうだと、正しい行為はこうなんだ、こうすれば天国に行けるということを伝えることによって多くの人たちをリクルートしていきます。このようなプロセスは多分かなり実態に近いのではないかと思います。ただ、それに呼応してしまう人がいるのは、恐らく個々の社会に責任があるのではないかと思います。よろしいでしょうか。

(司会) ほかに質問のある方はいらっしゃいますか。では、そちらの真ん中の方。

(D氏) あまり立派な質問ではないのですが、ISの人々が衣食住というのはどうなっていたのか、満ち足りているのか、非常に苦しいのか、そのところを簡単にいいです。一言教えてください。

(保坂氏) いわゆる戦闘員という人たちに関して言えば、そんなにぜいたくはしてないと思います。よく給料が払われているという話もありましたけれども、それはそんなに多いわけではないです。先ほどお医者さんの話をしましたけれども、例えばISに加わった外国人の中ではサウジ人や湾岸の人が非常に多い。彼らは自国で豊かな生活が約束されているにもかかわらず、わざわざそういうところに行って困難な生活を送っています。比較するのがいいかどうかは分からないのですが、同じ釜の飯を食うとか、あるいは中国の『水滸伝』梁山泊の話など、そういうイメージを持たれるとかなり近いのかなという感じがします。

もちろん一般の人たち、ISの統治下にあった地域は、一応普通の生活はできていますけれども、やはり恐怖によって支配されていたので、いつ何時捕まるか分からないとおびえていたはず。特に異教徒の場合には、異教徒用の税金を支払えば、理論的にはそこに住むことが許されるはずでした。しかし、実際にはそれは極めて難しいので、多くの人たちがその場を去っていかざるをえません。残された財産をISは戦利品としてIS内や戦闘員に分

けるという形であったと思います。少なくとも豊かな生活を送るということには多分なっていないと思います。よろしいですか。

(司会) 次で最後の質問にさせていただきたいと思います。

(E氏) サウジアラビアについてですが、ムハンマド皇太子の下、いろいろな改革がなされていると思いますが、メディアについては何か改革案などが出ているのでしょうか。また、ここ数年でビジョンが出てからメディアの報道等で変化等がありましたら、そのあたりを教えていただければと思います。

(保坂氏) ありがとうございます。メディアでの大きな違いというのは、やはりエンターテインメントではないかと思います。エンターテインメントについてはかなりの部分が解禁されています。もちろん裸が出るとかはあり得ないのですが、少なくとも、これまでサウジのテレビではほとんどあり得なかった音楽や、先ほどのドタバタのようなものも含めてかなり解放されてきたとは思っています。

ただ、だからといって政治的な自由があるかという、それは全くないといわざるをえません。従来どおりだと思います。特に最近幾つか報道があったのですが、サウジアラビア政府は例えばツイッターなどを監視している、あるいはツイッターでサウジアラビアに有利な情報を流しているといわれています。これは別にサウジだけではなくて、中東の多くの国、あるいはイスラム圏の多くの国がやっていることなのですが、それによって、国民世論をどこかに誘導しようというものは、特に近年イスラム世界においてだけではなく、全世界でかなり目立つようになってきました。

たまたまつい数日前でしょうか、ツイッター社でサウジアラビアに情報を流していた人が捕まるという事件がありましたけれども、それもまさにそういうことではないかと思えます。いわゆる報道ではありませんけれども、メディアという意味で言えば、一見自由になった部分と、これまでどおりの監視体制が続いている部分とがあります。自分がどういう立場にいるかによってサウジの現体制のやり方を良しとするか、これでは駄目だというふうに考えるかというのは、まさにそういうところにも表れてくると思っています。エンターテインメントを中心に考えるのであれば、当然今の開放の流れは正しいとなるでしょうが、政治的な部分を言えば、まだまだ不十分だともいえるし、逆に開放路線は間違っていると考える人が出てくるのも当然ではないかと思えます。

——以上——